

人間教育専攻

臨床心理士養成コース

吉田 悠乃

指導教員 中津 郁子

1. 問題と目的

青年期は身体的にも精神的にも変化し、人間形成にも大きく関わる時期である。青年期について、Erikson, E.H. (1959) はライフサイクルの観点から人格の発達を論じ、青年期における心理・社会的発達課題を「自我同一性 対 自我同一性拡散」としている。さらに、Erikson, E.H. (1950) は、この自我同一性の観念を、過去において準備された内的な斉一性と連続性とは、他人に対する自分の存在の意味の斉一性と連続性に一致しているという自信の積み重ねであると説明している。また、杉村 (2001) は「アイデンティティの形成は、他者からの分離や自立によってのみではなく、他者との関係性の中で起こる」としており、重要な他者との関係性の中から、個としての同一性を発達させていくことが重要であると考えられる。

近年、高齢化に伴い、ひとり親家庭や共働き家庭の増加などを背景に、孫の育児に深く関わる祖父母が増えてきている (大日向, 2014)。これには、祖父母期の長期化が根本にあるといえる。松信 (2012) は、祖父母期の長期化により、孫にとって祖父母という地位の重要性も高まると述べており、青年期の孫にとっても祖父母との関係が重要になると考えられる。そのため、孫・祖父母関係の視点から、青年期における自我同一性について検討することは意義があ

るといえる。

そこで、研究 I では、青年期における自我同一性と祖父母機能との関連を明らかにすることを目的とする。また、研究 II では、孫が祖父母との関わりをどのように捉えているのかを調査し、自我同一性確立の程度によって、祖父母との関わりを比較し、検討することを目的とする。

2. 研究 I 質問紙調査

(1) 調査対象者・調査時期

Z 大学の大学院生 102 名 (男性 59 名、女性 43 名) を対象に質問紙調査を行った。調査時期は 2015 年 7 月から 8 月であった。

(2) 方法

田畑ら (1996) の作成した孫・祖父母関係評価尺度 [孫版] の 30 項目と、谷 (2001) の作成した多元的自我同一性尺度 (MEIS) の 20 項目を合わせた、計 50 項目から構成された質問紙を作成し、回答をお願いした。

(3) 結果

祖父母の続柄、性別、家族形態を要因とし、3 要因の分散分析を行った結果、単純主効果の検討において、「日常的・情緒的援助機能」因子では、「祖父母」要因に 5%水準で有意な差が認められた。さらに、「世代継承性促進機能」因子では、「性別」要因に 5%水準で有意な差が認められた。

また、各尺度の因子間の相関分析を行った結果、「日常的、情緒的援助機能」因子と、「対自

的同一性」因子、「対他的同一性」因子、「心理社会的同一性」因子との間に弱い正の相関が認められた。また、「時間的展望促進機能」因子と「心理社会的同一性」因子との間においても、弱い正の相関が認められた。

(4) 考察

結果から、承認や関心、見守りなどの祖父母機能は孫の自己意識を明確にし、孫にとって祖父母が認めてもらえるだろうという内的確信を得る、重要な他者となることが考えられる。また、孫が祖父母の姿を通して未来の展望について考えるという祖父母機能は、現実の社会の中で自分自身を意味づける機会を与えることが示唆された。

3. 研究Ⅱ インタビュー調査

(1) 調査対象者・調査時期

多元的自我同一性尺度 (MEIS) 得点から、質問紙の有効回答者を高群と低群に分類し、高群に該当した協力者 4 名と、低群に該当した協力者 4 名の計 8 名 (男性 3 名, 女性 5 名) にインタビュー調査を行った。調査時期は 2015 年 9 月から 10 月であった。

(2) 方法

半構造化面接を行い、具体的な祖父母との関わりを回想していただき、質問に答えていただいた。その後、録音記録をもとに逐語記録を作成し、ケース・マトリックス (Miles & Huberman, 1994 ; 佐藤, 2008) を用いて分析を行った。

(3) 結果・考察

類似したものをグルーピングした結果、下位カテゴリーは 55 個となった。さらに、その下位カテゴリーを 15 個のカテゴリーに分類し、各下位カテゴリーと各カテゴリーに命名を行った。そして、各カテゴリーと各下位カテゴリー

を対応表にまとめ、高群と低群の比較を行った。

①「関心」、「承認」、「見守り」のカテゴリーに高群の対象者が多くみられる一方で、「干渉」や「不信感」のカテゴリーには低群の対象者が多く見られた。これらの結果から、祖父母との関わり方の捉え方が高群と低群で異なることが推測される。杉村 (1998) は自我同一性の確立について、自己と他者との間で生じる問題を相互調整によって捉えなおすことが必要であると述べており、孫が祖父母との関わりをどのように捉えるかということが、青年期における自我同一性と関連していると考えられる。

②「信頼感」、「不信感」、「安心感」は、孫と祖父母の信頼関係に関するカテゴリーであり、いずれのカテゴリーにおいても、低群よりも高群の対象者が多くみられた。この結果から、高群の対象者が祖父母と信頼関係を築いている一方で、低群の対象者は祖父母と信頼関係を十分に築けていないのかもしれない。

③「対等な関係」、「干渉」、「祖父母との距離」は、孫と祖父母の心理的距離感に関するカテゴリーである。高群の対象者が祖父母と適度な心理的距離を保っている一方で、低群の対象者は祖父母との心理的距離感を遠すぎる、もしくは近すぎると感じていることが推測される。鏑ら (1984) は、対人関係の視点から、青年期における自我同一性の形成を捉える際に、「対人的—心理的な距離を保つ能力」を重視しており、祖父母との関係性もこの能力が関連していると考えられる。

4. 今後の課題

研究Ⅱのインタビュー調査は、調査対象者数が少なく、結果の信頼性が乏しいと考えられる。そのため、今後は調査対象者の人数を増やし、再度検討していく必要があるだろう。